

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第六十弾

神社本庁再生への道—その二十三—
孤立化、無力化してゆく田中—打田体制
—組織の再生は神社存立の大義に基づくべし

藤原登 (フリーライター)

田中—打田体制の終焉

本年四月、最高裁まで争った職員地位保全裁判で、神社本庁は全面敗訴した。誰もが予想した通りの結末であり、普通の組織であればこの時点で、職員に対する懲戒処分が違法であったこと、本庁側が事実関係を頑なに否定していた告発内容の真実性が最高裁により認められたことで、言い逃れ出来なくなつた不透明な職舎売却の責任を負い、執行部は辞任するのが筋だ。しかし、何故か田中前総長は今も総長の座にある。

それは自らの意思でなく、黒幕とされる神道政治連盟の打田文博会長をはじめ、田中一派の幹部達による強力な延命工作によるものという声もあるが、包括下の神社や神職のことなど全く眼中に無い行為であることに変わりはない。

五月の評議員会において、この無責任総長は何度も答弁を求められても、田中派議長の采配で発言を逃れてきたが、最後の閉会挨拶は言いっぱなしで済むことを幸いに、責任回避の聞くに耐えない言説を延々と垂れ流した。この非常識な振る舞いを目的の当たりにした評議員の面々は、怒りよりも神社界の将来に對する危機感を共有した筈だ。そして直後の臨時役員会では、鷹司総理が新総長に菅原理事を指名したにも関わらず、配下の荒井総務部長に役員会の議決がなければ指名できないとイヤチャモンをつけさせ、その決着を法廷に持ち込んだ。その上で規則を楯に、総長の椅子に「なお在任」しているのが、田中総長と称する前総長だ。ここに田中氏の命脈が続くほどに、神社

神道政治連盟「LGBT問題」の不見識

本庁の社会的信頼が失われてゆく構図が完成した。まさしく、神社界の危機だが、これは同時に、田中—打田体制の終焉が決定付けられたことを意味する。

神道政治連盟は綱領の第一に、「神道の精神を以て、日本国政の基礎を確立せんことを期す」と堂々と謳っている。ならば国会議員懇談会は、その目的を達成するための重要な組織であり手段である。その神道精神とLGBTの問題がどう関連するのか、神道政治連盟は神社界の内外に對して、自らの見解を明らかにする義務がある。

筆者はこの問題を知ったとき、一連の神社本庁案件について最初に寄稿した五年前の記事(本紙平成二十九年十二月号)で触れた題材を思い出した。そこでは神社本庁の差別的体質が露見した事案として、「私、日

TBSの「ニュース23」の取材に對しても、「この内容が本連盟としての見解であるということはありません。したがって、本連盟として賛同するか否かを答える立場にありません」などとぼけた対応を続けている。そればかりか、公式ウェブサイトで公開していた同内容の記事を掲載した機関紙のコンテンツも、いつの間にか削除していったらしい。余りにも姑息な対応である。

それから五年、今度は神道政治連盟が議員懇談会で、「私、LGBTでなくてよかった」と主張するに等しい講演録などをまとめた冊子を作成、配布し、社会の批判を浴びた。

もちろん、失敗や過ちはどんな組織でも起こり得るが、一番の問題はそこからだ。事後の対応を見る限り、神道政治連盟には社会に目を向けた情報収集や政策立案の能力も、問題が生じた際の危機管理への意欲も能力も、全く持ち合わせていないか機能していないことが明白となった。こういう団体が憲法改正を目指しているとは、悪い冗談にしか聞こえない。

見かけの上では田中—打田体制は存続しているが、それは辛うじて役員会で過半数を維持しているからであり、今は完全に崩壊過程に入ったと見てよい。故に十月の評議員会では、田中執行部と田中派の議長、議事員がスクラムを組んでの、あからさまな議事の遅延行為と論点すり替えによってしか切り抜けることが出来なかった。この流れは、仮に現在係争中の総長の座をめぐる司法判断が田中派に軍配を上げたとしても、変わることはない。もはや大半の神職及び神社総代は、田中—打田体制の存在そのものに危険性を感じ取り、このままでは神社本庁が瓦解するという危機感を抱くようになった。

これも偏に、これまで長年にわたり田中—打田体制のもとで実行されてきた人事権や懲戒権の濫用をはじめとする強権政治の結末だが、今度は彼らが、その報いを受けることになるだろう。

田中—打田体制がここまで力を持ち、神社界を危機に陥れた経緯については、今後しかるべき検証がなされると思うが、彼らの失敗の最大の理由は、目的も手段も邪道であったことに加えて、日々、現場で神社界を支えている名も無き神職や総代の存在を軽んじたことにある。

権力の集中を指向してきた田中—打田体制は、権力を過信するあまり、あたかも自分達が全国の神社の頂点にいるかのような錯覚に陥り、結果として神社界の全体像、そして本来の姿が見えなくなったのだ。小なりと言えど、神社は神社、神職は神職、氏は氏は氏子であり、地域社会にとって、それぞれが何者にも替え難い存在なのだ。

これからの課題は組織の再生だが、その前に深い反省がなければならぬ。その上で、神社存立の大義を堂々と語ってほしい。それが、次に神社界のリーダーになる方々の大切な役割であると信じる。

深い反省と神社存立の大義のもとに

藤原 登 (ふじわら のぼる)
昭和二十八年、東京に生まれる。
昭和五二年、専門学校卒業後、広告代理店勤務の傍ら、独学で歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。